

911.3
八

俳諧新式

鷺水

とせむお刊つげく。板立おつるいそいそに
うまゝもさげしらすと。何れもさかん又書さそ
おと。うら國をささめぬ。格外の格をもとく
なうささるにうひて。今け種集とあひさる
おと。是やん真徳の正法眼をさ。立圓け骨髄
作者の法とあひ目かうけと。何のふあれを
おと。乃先哲千果乃今よれ。ものあつる客
けと。さうたあふく。さうけと。推く新武
おといんも又ひなあつと。や。や。ふ。そのいさ
さう。さうれが。何。おと。も。い。い。い。作者の格

何。あ。お。綴りく。世ふ耳は。な。つ。さ。さ。を。め
ゆ。これ。さ。う。う。古。人。の。言。え。な。れ。と。

御溝水頭白梅園主

鷺水

誹諧新式目録

能諧之者を以て書し何れも其 全編

句と求家の月抄 并五圓段

一丁メ

又其れに變 古體授ふりて

十丁メ

古義怪癖 流家口邊りての引白

十丁メ

四季詞 得に用新熟字 自かふ

九丁メ

二月の詞 年中のりてまじりて物言ふ

八丁メ

三月の詞 日

七丁メ

四月の詞 日

六丁メ

又月の詞 日

五丁メ

新暦

六月の朔	日	八十八
七月の朔	日	八十七
八月の朔	日	八十六
九月の朔	日	八十五
十月の朔	日	八十四
十一月の朔	日	八十三
十二月の朔	日	八十二
如字乃辰	今梅并合辰引白	七十九
神祇の朔	乃辰の朔	七十八
乙未の朔	日	七十九

述懐の朔	日	八十一
義傷	今梅	八十二
非人	日	八十三
那	日	八十四
編み	新	八十五
才	三	八十六
句	作	八十七
ち	て	八十八
ち	て	八十九
ち	て	九十

ひの字
うの字
ぬの字
のれ字
れの字
くの字
やの字
まの字
けの字
ふの字

百九十九
百九十八
百九十七
百九十六
百九十五
百九十四
百九十三
百九十二
百九十一
百九十

この字
はてあ
さの字
さの字
ゆの字
ぬの字
みの字
しの字
あひの字
もの字

百八十八
百八十七
百八十六
百八十五
百八十四
百八十三
百八十二
百八十一
百八十
百七十九

五十九

百字

引白平仄甘苦

西平

今

百五十八

洞名對句式

而
丁

百

百七十一

心之八九ヶ條

凡例

一ノ欠に誹諧の四字を
 一ノ欠に誹諧の四字を
 一ノ欠に誹諧の四字を

上モカラ
乃終
玉為
和定
トウ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

トウモウ
童蒙
ら
不
凡
の
受
法
か
ら
し
ユ

く
三
三
と
毛子
井
メウ
カ
カ

先生貞西之圖

の
後
又
と
記
し
て
道
を
興

後學之說コウガク

[illegible]

3

一句と来の目録并々義古義の悦いふ言葉
の口受と云ふもけだ乃好士知りて有
るに最板とせうれもわんもかゝるい
粗末と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
儘に此の一家の秘文と漢と漢と漢と
乃龜鑑と云
一曰季子之祠也旧年二月より二十一日迄
二千八百十ヶ条くらゐと補ふ得れども
新字乃季に用ゐる是名のたぐひ六百
二ヶ条と云ふ合してこゝろ二百十二ヶ条と

なり
あるに後書に考へるもの下に和漢の注釈
と加ふその百廿二ヶ条と云ふ
一世にわたりて切字と云ふと云ふと云ふ
季の祠と云ふに並べて假令乃進考
れども最板の祠に先刻と云ふと云ふと云ふ
唐ふのさみく字と云ふと云ふと云ふ
時侯乃進考季の祠と云ふと云ふと云ふ
何ふおてりあひや思ふと云ふと云ふと云ふ
さ知る今此例小解と云ふと云ふと云ふ

二子七百一といはるはの河よきうひくぬむ
 一 和んイヨシの意オウシユをうへるはの河よきうひくぬむ
 一つくシタ乃下カシカヘアハセに丁敷テフカスと記シルし早ハヤにの月ツキの
 下シタや考カウ合カヘく来モトぬ影カゲ乃カくもに思オモふ
 だゝゝ人

誹諧新式目

誹諧之連歌を書く

誹ハ敷尾切音斐ヒノカシノミなり誹諧ハ誹ヒと諧ハなり又
 俳ハ歩ホ皆カヘ知チ音牌カンく誼イハ俳優ハクハ雜戯サカシくといひ
 て俳ハクハ歩ホとありしを訓ノリと史シ誹諧ヒハクの二字を
 史記シキ名滑コツ音イに準ニしるの趣ソツ并ナラ右利ミチにあふ
 その言コト諸モロ乃ハく火ヒととあふいひをくを
 清補セイホの集ツミを抄セウふと書カきし誹諧ヒハクハ字ジハ
 さこく讀ヨミくをともありし則スナハチ誹諧ヒハクハ字ジハ

談笑乃二字に通ふなり理ありけり終るに
いれ誦の字と書けり言ん非あり然れども
度も非なり小無ふと角ありやい説あり又
説い誦諧の誦一言篇と書る字義いけり
ふれに情ななりとあり和と牌の音なりやあり
なり紀氏も古今集に書る然れどもい
いふの抄物と見えぬふと法の然と書くホ
クエキヤリや能流とけりふ有り只やのま
いふとありとありとと二重能流と
物に久惠切計なりといふいふ角しけりと
いふ

是と云ふの字なりは留年をせしむる事なりてク井
 よりと点しし事ありけ又神書し舎人親王乃
 楚歌と註しし此云俱胝跋羅々箇須也あつこ
 きの楚を思ふ事いふと清きといはるこ二重うんか
 かり今此諺の事もなれ親といふ点とけり
 こを思梅し云ふ二重假名をもいふる一跋み切
 比ふといふ其理あふし知る事秋やを華と
 点と云ふとクニと付属とすといふとク井と付属を
 字よりよりしむる事ありけ又その事なり
 閑合のつづみ屋にけりやうてケもきもなゆ

ふまに詠の字にあくと反切（ニ）と見ても、（ク）斐の
音とあつてさうして又あふ人のには然（ク）し他の四
書いふ名乃字祈（チ）と声（ヒ）音（ヤ）にかゝる義と會
蓄（チ）と同一文字といふとを明かすよりとも
異訓異義とあるとやあつて、（キ）神代より
しやう又字とありし人となすは、（ニ）統倭名
乃四十七音の事也（ニ）れなふありとなく、（ニ）万葉
など彼國の文字より和語の訓とひくさん
音（ラ）聲（セ）もさうしやうにぬくものとさ
をせしよりと今れ訓とたゞしきといふ

の初^{ハツ}にふく^クくと受^{ウケ}るをありとせし中^{ナカ}少^コをも
 んえらぬとあるといふもやあつてゐる初^{ハツ}と又
 おうりあるといふ事^{コト}あり（二）喚^{ケン}犬^{イヌ}追^{オヒ}馬^バ鏡^{キョウ}（三）と書^{カキ}く
 町^{チヨウ}見^ミとよりを將^{マダニ}播^ハ良^ラ也^ヤ書^{カキ}く
 中^{ナカ}と又神^{カン}其^シ乃^ノ注^{チュウ}とあるを惣^{ソウ}して字^ジ義^ギに即^{ツキ}
 ふるはたゞ一^{イチ}であるといふは字^ジ義^ギとなす
 とへはあとのにたりとして所^{ショ}と字^ジ義^ギと用^{ヨウ}ひ
 例^{レイ}をも有^{ユウ}するが如^{ガド}いふは通^{ツウ}正^{セイ}字^ジ別^{ベツ}正^{セイ}字^ジ全^{セン}義^ギ
 讀^{ヨミ}ず義^ギ續^{ゾク}かずといふ底^{ソコ}月^{グヱツ}介^{カイ}れりともありに畢^{ヘッ}
 竟^{キヤウ}といひの二字訓^{キン}ふより義^ギと爲^{ナリ}義^ギ

いふに類へて愛嬌乃和軟れ道に今さういふ今くも
あに連軟といふものいふより軟書なりとて
を知りていふ初ん人いふとて誹諧の商
の世話にほそくもいひしやうあに然るも此
道よりより田吏野人となるふんをよき田舎
乃とくとも敬い凡物のをさるんを弁ふ
おちり上右の凡俗も知りてとく人の人ふ
ちにいふりやんいひて非道とて敬西
に家儀乃流るるにふい諧の字をよめつと彼
易行念仏の功にふんふ一称なりといふと十惡

の業因と消えたり乃性もあふふる人
之に字書に往て變なりと訓ありてゆきもつとれ
やもやもあやうりりやを眼才とつとるもい
と物もちうのふとかゆれねとて七なりおつとふ
ふやうに浮家ふも之にやかく男いふ助語の字をた
おむやうにふの凡俗四字の名称と嬌ふとい
物語のふふ比に假名の之を加へて成へてやや所
記をいふ
連ハ聯なり格あり今く家かん不感もあやう
詞に愛し他もいふの性乃初にむもて聯格

歌に析るを技あり又哥の字に用ゐるは詩の字に用ゐるに何
 なるの歌の字に用ゐるは詩の字に用ゐるに何
 永言分二可長引其声以誦之也一説支小歌詠也長引
 其声以誦之也一説支小歌詠也長引
 其声以誦之也一説支小歌詠也長引

一、師範、計部、内務、文部、海軍、陸軍、農商務、逓信、司法、文藝、
 教育、衛生、警察、消防、土木、建築、造船、航空、鉄道、郵便、電信、
 銀行、保險、証券、倉庫、運輸、通信、情報、文化、スポーツ、
 観光、福祉、労働、環境、自然、資源、エネルギー、宇宙、
 科学、技術、産業、経済、社会、政治、外交、国防、安全保障、
 国際関係、平和、開発、協力、交流、理解、尊重、平等、自由、
 民主、法治、正義、誠信、責任、努力、進取、向上、発展、繁栄、
 安定、幸福、平和、繁栄、発展、向上、進取、努力、責任、誠信、
 正義、法治、民主、自由、平等、尊重、理解、協力、開発、平和、
 国際関係、安全保障、国防、外交、政治、社会、経済、産業、
 科学、技術、宇宙、エネルギー、資源、自然、環境、労働、福祉、
 観光、文化、情報、通信、郵便、鉄道、航空、造船、建築、土木、
 消防、警察、衛生、教育、文藝、文部、海軍、陸軍、農商務、逓信、
 司法、内務、計部、師範

仕切やせとてゐるにこそ繁しき人仕に
あふあふとて葉一すく西張とまゐり仕
とれおとせけりよとの光を隠さくひく
に樹也とて候より深きにさむ入金一切
いさゝ練磨にあひひくよんつぎはく
とちもかてんは源より清きに葉一
いふなとて葉乃ん凡情と仕て一
らしれとてまゐりく求ち葉一
地盤に候はくともいふ子とて
さそと候とてりまゐり葉一
ホシ

又あへりゆきるはくともかち候とてまゐり
決牙にあらりてくま今くまひ葉一
さそ一のちまゐり一
りてたとてまゐり一
を葉ひ候とて人よよとのち候とて
あそとてはくともいふものもまゐり
とてりまゐり一
とてりまゐり一
あもたとてり一
角入門とてり一

神ミコや一返ヒトタビ答コタヘよといひく樂タノシしくやとく供ヨミけし
せかしくまひくことシテセリ辨ワカ別ワカは受ウケけしこと又回ウラ入イの或人
をばる一府サを治ノチふみふ人数ヒトカの中ナカよてふとんやや
わひく或アルヒいふめいおを見ミんらんを答コタへん
のまゝあをたそ一府ツリのさうを毎ミヤト交セイに制セイ一の
ちる處ナラは非ヒとあひく對タイ面メン一又んを志シる
まゝ人ヒトをそあひくやふ是非セヒを教シくてあは
え優ユウあひくさうとまはるんそ何ナニの能ヨキ乃ナ人ヒトは
やまひくあひくもれ一又さあひのさう能ヨキ白シラなとふ
おスコミ執シユヒツ業エヒヤリのまねをばらんさうあひくを業シツ

名ナ乃ナあやうとせ又シテ官カンにたふと好ヨクひありうたふとこ
のひ人ヒトありしこととそさうゆきと非ヒもんや答コタへ
にまゝけしやうに辨ワカ別ワカも治ノチをうく定サダメふれ
成ナへ一太セリ宗ソウ院イン一ヒト親シン主シュ入ニフ本ホクれしとあさうしあふ
はくし書カ人ヒトを等ノチと銘ツクロヒしやう書シふこと
よしうもさうにさう一切サイうやあひくはさう
くやんとて等ノチと紙カミおつうめくあひく業ノチさう
人ヒトの根ネ藉セキあひくさうは強ツヨクくいへし次カラ女メのさうとあひ
道ミチ野ヤ見ミといふ人ヒトと人ヒトは減ヘふこの田コト和ワ法ホフふと
なぐやわひつる一ヒトまの聯レン綿メンやうさうと

うにさぬくはせ一おい故す 私に故するといふ人あるものと云ふ

る小所のよりなり知るのより神祇のよりなり てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

矢石段にお山のより 私に故するといふ人あるものと云ふ

る ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

川のをそて ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

大由牛車のあり ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

句二つふんの ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

め ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

は ホニセツ 私に故するといふ人あるものと云ふ てあるいゝ志の付方に楊梅紀の

[illegible]

春秋の句をよむに云ふよりなるまゝに續く處にそのを
 百韻中を及ぶこととて定りては多に及ぶ人あり
 ぬれぬ系するまゝにうつひ首一句作らば
 難いこととほしく一句のうら詠れられたこととて
 そろふ人難うしうさうなや又初人のけいむ教のあや
 う練より一人ありはの騒動あうるにりあこととて
 や侍人御は初人のうらひより句と濁りしやう
 小仕はるうらひよりわづらひし功を入く後
 句教のあやうとてあはしうに歌をもふふとて
 なるに先極もてふたれつとてのんらとて

あからうー人いともうーに 赤人 せとやうこの 様九

口くろくくハ黒く くらにうーまーく 明大

是と篇 序歌曲流の六美とらうて一字くになて

るのびうーくおひふふー 寂蓮法師乃知

おも是と用ひくくくく 寂蓮法師乃知

乃五美とうりりり 序體腰偏

流とー 一のほは右階ホあるい

惜流曲證題

あうふとねうらかり 庭うの敷ええ

秋の夜を月

惜流支歌證

かみふ乃そのま指の言られいさうあを

せこのしあいさいふ

惜序歌曲證

おとひおふとれいのふういーい

くあきあきあきあき

序歌支曲證

あにーいあうつまんときーあ

さのうまうまうま

紀要くくく 標流支曲證

とらふ句とらふ係書とらふ号との色とらふ

ク
リ

ハキ
フキ
キノキ、
カ
貞徳

ふの氣カイやーらこさうシモ 夢ユメの法ホウ 季吟

穀^{カウ}とてこのふ乃震^{シク}々々乃^{シモ}新^{シモ}驚水

比ヤクモ三セウ
八雲テイカキセウ抄ウラいヨハくハ比ウいハおハとハへハあハ世ハまハのハふハやハすハくハ

[illegible]

なり法捕キヨステの云ニヤウキ正義ニヤウキ小いニヤウキく見ニヤウキ今ニヤウキ之ニヤウキ失ニヤウキ不ニヤウキ敢ニヤウキ行ニヤウキ言ニヤウキ取ニヤウキ

比類以言之今按此ハヤミモノノ方ニ物ホトモナク

そのふゆとてこのゆへに比とをさるゝあふふ蓮院

とある今乃中書に比はるもの故方々果然と云ふ

世俗にあふと云ふると又同く之を我の云々云々云々の

方々を以て此に多と爲すなり

傍派 ヨハ
 ちとて入奇と字を
 名教傍派の月白 ニシキイロ

下
ふみ
地
に
き
う
う
定
居
所

と云と云く散チルの字チハ塵チリにチつりあふと云ふ

[illegible]

トラヤ
社
の
志
を
な
げ
る

おせいのと書つゝ孫多しと被定家々の四被と

ととをへーふとうあいの内付外 季々吟
ハハキキ
 常木やサシの秋の色 鶯水
シチ
スキ
イロ

雅
八雲抄といふ
將ハオと云ふ
といひ古今

テイカキヤリ

[illegible]

始より終までいふを以て終は二つあり一は言終

二、小意將之言將と細くをいふなり

わくうひし 井カ 之 務 人 心 せ ぐ ち へ あり こと へ

卷之五

春のふゆをかりてふゆの

中名長子 けさく人

新ういんいすくさく初いそフー
 スナ子
 4
 フリ
 疑い

きり 身と心と木のやうなと終らんカキの

字は「カ」下「是」人「叶」今「此」奇「之」法「捕」

[illegible][illegible]

なるるを孝子と云ふは後頌の意にあらざる
いふも神祇に告ふは頌の意にあらざる
故に毛詩の序は養盛徳之形容以其
成功而告神明と云ふ是を此頌の
意に合ふ文と清猶のいふ正義はいふ
之言誦也容也今之徳廣以養之と云ふ頌を
頌也稱徳之義也いふは容と云ふは
頌といふはと云ふ字義のいふは容と云ふ
容は主として感徳と云ふなりと云ふは
頌といふはと云ふも容と云ふは頌の意に
合ふと云ふはと云ふは頌の意に合ふ

頌と云ふは神に告ふは頌の意にあらざる
故に毛詩の序は養盛徳之形容以其
成功而告神明と云ふ是を此頌の
意に合ふ文と清猶のいふ正義はいふ
之言誦也容也今之徳廣以養之と云ふ頌を
頌也稱徳之義也いふは容と云ふは
頌といふはと云ふ字義のいふは容と云ふ
容は主として感徳と云ふなりと云ふは
頌といふはと云ふも容と云ふは頌の意に
合ふと云ふはと云ふは頌の意に合ふ

神乃ちさるこころや代の家橋

とくそ引くあつらふ定家郷のいづれ家祇

法師乃親をいふを叶なれやして誹諧やと宗

貴の白れんしきいひ付る

信あまは是を花橋をきこくか貞徳

冥かあは家宿よあはれとあはれを季吟

拂ふもは神をえぬに花はうれ驚水

右の説と引くのさうにさうく名乃多とさう

あつらふに信よいくがさそち義のうきと區る

さういふをひた乃興義ハ哥連誹やとふて門の

一字に終つてはさういふ人ハ信受とさう

やういふ

四季詞



うつろ月 うつろ月 じつさ け月ハ秋味とさう

いふ月 いふ月 じつさ じつさ月といふ人の子のさ

あつらふ月 あつらふ月 じつさ じつさ月といふ人の子のさ

け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月

け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月

け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月

け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月 け月

廿四日

クツク、モタ
具足餅
田 元

はつたての

小
ユカウ
京
コウ
概

杜桺 桐子

船子てあひ

社通てう

天てうもひ
 万えこ
 万のもひ

ユ
ト
ノ
ハ
レ
タ

子冬三三

叔奇

初六并

ひふく

猿サル

く穴棘乃字と

り所と云ふ

ありくゑは不慮とありて其の豫の月也と云へしと云ふ事と
後より有りて由くして洗米とありて今ハ之を洗米と云ふ

[illegible]

冬

福

莽蒿摘

新
集

子
審抑

毛家寺天狗宴

一

卯杖

外
框
口
封

との芥子目うしの
オスとメスと寸小

切く二斗三升はゆひく
林の中へちまうのうとらふ

二宮大養

二日安文申
乃委而五之

三ノ大とあるといふ

テラキキウニウ
朝覲の幸

二日天子のしるしとて

極政冥白の家は、要所なり。大長官のときとて、
もてはとせむ。そのとき、大長官のときとて、

三月

白の連初
三月

孝子

天子居籙白菟赤兔のふくとうとや

宿務ふたつ、耳のふち
 へ、ふたつ、ふたつ、ふたつ

小ぬくもふとふ子、懐万病膏也

栗の
松乃内ワチ

春

改年カイネンの示意キヨケイ改めんとすなり

履端乃受

と云ふべしと云ふなり歟と云ふの如く

作不見とてくうくうとてふ
 うとてふのうのうとてふ

慶新什慶

叙位ナリ京官降月とて京中友達のアラミナセサエ七日の陽のうら

月七日白くると見えたり一の四乃物もとのそくとあり

七月四月ニナツ人月ヒトツキ初めとれり屋のふふ一日と影四といひ二

四と物四といひ二日と物四四と年四四と

帳チヤウ不貼フツキと七日後ふり人と盛くくはくとそりてくも

面オモテミツキ突ツキ七四ナニカ栄シメ摘ツミ川の神事カミコト七四サイエ御ミ齋イハヒ會エ八日ヤチヒいそわとも

ては九年のふ月に宮中并に院司等々金光明院と

寺シラ延ニ勝シラ十一年シラ二月ニ元シラ勝シラ王シラ院シラとて

馬ウマ云コト院シラの修シラ法シラ八日ヤチヒ禁中キンチュウ有アルる

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

なりと年と金剛界なりといふ事なり胎藏界と大之師オホノシラの法シラ八日ヤチヒ

草ワカクサ
 小コわさサ ちチきキいイとトえエ
 こコまマくクるル草サ しシきキ
 ちチわワうウ萩ハギ
 菖アヤメ蒲フシ

和景 韶景 春ノ景ナリ 良時 芳時 春ノ時ナリ 淑節

麗景 四機活法ニ人静尤知一長 春光 活法ニ世界分爲花裏 春ノ景ナリト有 華節 良節 芳節 嘉節 共ニ春ノ節也

淑氣 在審言カ詩ニ一催黃鳥暗光轉頸綠 應春 詩学大成 楚辭ニ青

日正ニ一 百紫千紅照眼 同又之反用類 青帝 帝司推

條凡全歲謂之春時 主日 皇 恩沢魚窮限 東君 唐子西カ詩

蒼天 春ノ天ナリ 勾芒 春ノ神ナリ 大皞 漢書ニ出タリ 青陽

武帝纂陽和 白居易カ詩ニ先遣 花蓋 夏侯湛賦ニ春

為蓋 心陽 前律曆志ニ出タリ其詞ニ一者東方 迎陽 立春ヲ

土牛 同上東坡カ詩ニ土牛明 燕 歲時記ニ立春ノ日志ノ

生采 奇人月令ニ九ツ立春ノ日食生 解凍 礼記月

灰 楊景記ニ立春ノ日宜陽金門ノ作ヲ取テ管トメ 灰飛 詞ト同

官通 續漢書ニ出 新陽 詩学大成 微和 淵明カ詩ニ出

木德 隨ノ青帝歌ニ震宮初動 華始 礼樂志ニ出 春生 律曆

タリ春ハノナリ物ノ動 歲始 公羊傳ニ出 梅 江梅 趙彦林カ詩ノ

嶺梅 同ク嶺ニアルヲ一ニ活法ニ天賦幽谷異衆セカ 官梅 官人ノ内

杜少陵カ詩ニ東閣官梅動詩典ニ野梅 野ニアラ 古梅 活法ニ古梅ノ

還如何遜在楊柳ナト 賦ニタリ 野梅 伊フナリ 古梅 詩ニ花根深

谷已チ年曾見 庭梅 庭ニアルニ 溪梅 タニノムス 粧梅 梅ノ色ノウツクシク

蟠梅 活法ノ詩ニ屈盤蟠株倚石根 月明花 苔梅 苔ノ莖タル 飛

梅 雪ノ中ノ月梅 月夜ニ見ル 風梅 凡ニナル 烟梅 露ヲ霞ノ内ニアリ

せんりくのあまふちらくによは五月の申社
 遷をせうしたあまふちらくによは五月の申社
 新年案

大原野原

冬神文のつとふ七百二十二の和と多くと
年災と移りしより天候て主四年二月に始
紙園の八備八日列

見冠と氣とつてとち故あつてくるもの
若野の餅くら

一日比良の八つあり
二月堂のおこすひ

遺教経
九月より十五日とすむ七中ねとさ
佛乃別
二月のいれ

新味にねね
十五日の表さうのふとさあつて外の表
とすむ

貞福寺
日積塔
十六日光孝天皇のいふと表れ
とすむ

春の景
二月の
中

秋月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

秋の月
二月の
中

[illegible][illegible]

星鳥尚書二日中星鳥以四陽仲陽同上拾翠類書纂要二月

花之時踏青類書纂要二月民俗推勢酒出郊外賞スルヲ

芳朱文公カ料峭武帝纂要春入知連綿字温和春寒ヲ云ト

萌動春ハ方木ノ萌シ和暖ハルノ自ノアタ舒遲ハルノ日

ナル冲融ハル長閑湯漾春ノ光ノ大鮮明春色ノマ嫩緑ハルノ日

リナル微暖早春ノタニ淡晴天ニハレタル貞

三月己の月己の月上の月疾疾曲水の宴三日三日

ハル振陰陽陰陽桃花の春三日三日

折折花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

とと花花の春三日三日

梅鑑

さくさくし

和布

柳絮

お船

こゝろ

葉子

影

葉摘

母子

さくさく

桃

さくさく

いさく

はるの

山梅

花さく

やえさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

さくさく

載陽ハヤ活法ハツ六春ロク部ブ二類書纂要ニ三さん月也ゲツニモ寫ハ時トキ三さん月げつ

載陽ハヤ活法ハツ六春ロク部ブ二類書纂要ニ三さん月也ゲツニモ寫ハ時トキ三さん月げつ

竹秋日浴沂論語 飛絮詩學大成楊柳落化歐陽公

出ダ緑戦紅酣李太白力催暮詩杜甫力花信 歲時記

采華唐詩狂點芳叢徐玉泉詩出 淡煙濃緑信力詩

ニ出タリ皆芳菲鄧春隱力 豐陽楊柳詩出 上巳の火

春色ヲ云 三月エラ日本朝ノ民俗水追ニ出テ教レテ吳厄ヲ排ト云ハ

上巳續漢志ニ二月上巳官民皆徒飲於東流水上ト云ニヨレカ

當世只三月ヲ用テ上巳ヲ用ヒス徒ニ重三ノ名トナルハ 元巳張衡

宋書ニ自魏後相用三月三日不復用已ト云ニヨレリ 上除徐幹力

賦ニ出タリ 良辰張華力上巳芳辰活法上除都賦ニ出

冠節李在賦清節荀勗力上辰宋書令節詩出

祈祉風俗通ニ出上巳ニ 福ヲ祈ル者也 三月の月と云ふ月 更衣 田舎

青 乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

乃旬 一日内侍篇と云ふと云ふ上巳に云ふとの 魏唐書 一日宗

[illegible][illegible][illegible]

花井 徳正 弘治大師の甥也
林之 隆正 同父兄也
松本 俊成 同父兄也

梅天 如法の天 常酒 麦林 林書の林 善 望

三夏以上元帝纂孟夏礼記ニ一季初夏活法ニ四月畏日傳

槐夏活法ニ日長知一雲黃維夏詩經維夏四月畏日傳

夏日可畏長日唐ノ文宗ノ詩人皆若炎熾日暑傳

出火雲杜子美詩奇雲活法出

炎帝魏相傳ニ炎帝乘離執衡赤帝淮南子祝融礼記月令

長嬴朱明元帝纂要光明尔雅出氣暢正陽西京雜

假宣前律曆恢台楚詞ノ星火書經趙盾左傳出又

大火繁欽賦出氣陽管子ニ出黃雀周處風上記出蒸

少韓文出牡丹北化王花紀名錢思公常曰姚黃西京雜

記出天香李詩ニ云蘭蘭白居易力臧休詩出

玉東坡玉香馬三才力國香田器之力仙衣活法出同

名子月子錦苞楊妃西子鴨綠貴品玉膚

雪華紅衣金縷五佩風葩露蓋羅上

園機活郭子規格物論杜鵲杜子養力同

舊周怨鳥余雅謝約張華力思飯樂格物論ニ出ニフ

リテ鳴杜宇漢陽傳力黑羽蔡宗堯力蜀魄杜荀鶴力

不如歸范文正不如歸去格物論

五月五記

五月五記葛蒲之内張司倍子仇

粉
團

[illegible]

颶ク風フウ 南越志ニ出
 交ノ風ナリ
 碎サイ錦キン 活法
 ニ出
 舶ハク舩フナ 東坡詩
 ニ出
 舜シュン琴キン 家語ニ出
 ニテ交ラズ

卷八

活法ノ詩
ニ出タリ

艾節カイセツ

蘭

三

やまふしあふし月とふを冬田のみ

にとりてしるのなまはる中正月に
なふともひりあせとふとふと累しき
イムヒ
月

之何入

あはれに

和の山

中三五

付とを

省中の
カエ

元
元
元

我々

とく

う
か
も
の

十一年九月

...

望

く
あ

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or a page from a book. The text is written in a cursive style and is arranged in several lines. The ink is dark, and the paper appears aged and slightly discolored. The text is written in a cursive style, with some words being more prominent than others. The overall appearance is that of a historical document or a page from an old book.

勢国衆^{ナニ} 十四日
い川^{カハ} 将衆^{シヤウシュウ} 十五日
竹生^{タケナマ} 將衆^{シヤウシュウ} 十六日
戸山^{トヤマ} 衆^{シュウ} 十四日
系^{ケイ} 定食^{テイシキ} 十六日
高岩^{タカイワ} 薩海^{サクカイ} 十一日
多岐^{タギ} 奇衆^{キシュウ} 十七日
志波^{シハ} 奇衆^{キシュウ} 十七日
多岐^{タギ} 衆^{シュウ} 十九日

富士 市 院
 乃竹 愛宕 橋
 後 大坂 堂
 乃竹 愛宕 橋
 後 大坂 堂

[illegible]

二十四日 昭臣曰小糸雀門よりあつてゐるゝとよもゝはさへや

[illegible]

なまの枝

才の資とて一て川

五

人主欲以國

是も大匠と稱せし
まゝなり

らゝのそとにゐる人なるは
そとにゐる人なるは

希
六
月
廿
日
凡
付
書
羽

カウケ
子化
ホカ
量

六四

四季の風物なり 立秋の今より 季夏の
 心より 中央の今より 万葉の今より 万葉の

人々として、土王と人とも、喉交は、皇子の中央に配し、三つを
 聖王の大おとしに、土王と人とも、喉交は、皇子の中央に配し、三つを

を方とせられしを伏下の位ありとれて善玉の火氣にあらねど

伏し 牙の床と中の伏し 立秋のりのの 出用 川 9

あふき車 あふきこまひ
うき
うき
アセノコ
13

竹收竹婦人
月王

抱養 断る
ノミ
需ヒ
カ
思ふとく

[illegible]

三
海
上
の
舟

男おとこあみあみここそ
力ちからあみあみふふみみあみあみ
轆ろく約やく
轆ろく子こ
海うみ船ふねとと親おや

男オトコと云ふこと
 轉カハツ約ニ
 銀カネ子コ
 子コと云ふ
 月ツキと云ふ
 親オヤ

とくふく
きふにひと
そつひあ
けり
あまふ
なり

竹ありい　やのさ　ちり　ひ　あ　ち　あ　え　と　い　あ　う　の　ほ　り
 と　と　と　あ　と　あ　を　は　は　い　と　と　と　つ　ひ　あ　け　あ　ま　れ　い　あ

三十一のころ
 乃橋ハシ
 小云座のち奥の中七ツは中の人衆のあそびといふこと
 ひく橋をとりてさうさうと面敷教士人を入る一花菜とりて
 ぼろまそうのへたをとりてわけて牛歩といひのとこに草の式を
 かきおろし七つの細とうもろこしとちり爪草事とりて入る
 としつゝ
 れ下には
 とくやれ七れの
 汁ともなり
 のまふ
 てみえう
 本門跡乃花カコハナ
 七月
 蓮の草ミズアオイ
 七月
 南山入掌の古例に依今八歳
 文珠とていふ

[illegible]

十六日大内へ
御と貢じき

盆のつと入

十六日伊勢山内より入る

とるるハ

安房の院

十五日午二二
月十五日あり 解基

火

みきけ

地蔵宗

衆

みきけ

地蔵宗

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

御霊祭の出

十八日

相撲

垣^{カキ} 天^{ヘチ}瓜^カ 蕃^{サワ}椒^{カウシ} 蓖^ヒ麻^マ子^シ 蔓^{マン}の^ノ実^ミ

早^{ワセ}稻^セ 木^ホ瓜^カの^ノ実^ミ 槐^{エニ}乃^ノ花^ハ 常^{ジョウ}山^{サン}の^ノ実^ミ

秋^{アキ}の^ノ烟^コ縹^{ラウ} 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}は^ハひ^ヒ 秋^{アキ}の^ノ夜^ヤ 日^{ニチ}々^々

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル 秋^{アキ}乃^ノほ^ホる^ル

漢易周礼云氣の秋

九^ク秋^{シュ} 素^ソ秋^{シュ} 元^{ゲン}帝^{テイ} 纂^{サン}要^{ヤウ} 秋^{シュ} 陽^{ヤウ} 孟^{メイ}子^シ 秋^{シュ} 陽^{ヤウ} 金^{キン}神^{シン}

韓^{カン}文^{ブン} 金^{キン}神^{シン} 按^{アン}節^{セツ} 炎^{エン}氣^キ 同^{ドウ}秋^{シュ} 文^{ブン} 選^{セン} 同^{ドウ}秋^{シュ} 摩^マ涼^{リョウ} 廬^ロ秋^{シュ}

勁^{キン}秋^{シュ} 類^{レイ}書^{ショ} 纂^{サン}要^{ヤウ} 秋^{シュ} 容^{ヨウ} 活^{カク}法^{ホフ} 淡^{タン} 平^{ヘイ}空^{クウ} 秋^{シュ} 容^{ヨウ} 魚^イ 爽^{ソウ} 氣^キ 宗^{ソウ}カ

詩^シ 出^{シュツ} 高^{カウ}秋^{シュ} 杜^ト子^シ 美^{メイ}カ^カ 詩^シ 高^{カウ}秋^{シュ} 晝^{シュ} 秋^{シュ} 日^{ニチ} 詩^シ 經^{キョウ} 落^{ラク} 日^{ニチ}

白^{ハク}日^{ニチ} 活^{カク}法^{ホフ} 同^{ドウ}是^シ名^{メイ}は^ハ用^{ヨウ}る^ル 秋^{シュ} 小^{セウ}昊^{カウ} 月^{ゲツ} 令^{レイ} 出^{シュツ} 主^{シュ} 神^{シン} 也^ヤ 聲^{セイ}

律ハ八懐糸ハ音
 志笑ハ人糸日
 志ハ夢縛糸十五

宇佐宮 十音

箱寄糸 日

月

この月 月の

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

月のついで

月のついで

月

月のついで

蒲萄 タマ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

薔 スベキ 花 ハナ 葉 ハ 蔓 マツ 花 ハナ 葉 ハ

こゝと石とん　こゝとものゝあふゑ
こゝとのあふゑ　こゝとの目あふ
小^コ初^{ハツ}　こ^コのり　つゝ
あつさい

鷹タカ
うーあーうふに
うーとーうや
宿タカうい
やうとう
たの

く
う
きくま
換^カ
転^{テン}
ちりぢり
下^ゲ
葉^{エフ}
あふれ
うふ

[illegible]

江鮭
鮭
小鮭
い

けの
野
分
八月
大風
う
う
う
八月
八月
秋
の
回

田をつく
田の毛見
稲ふ

[illegible]

列れつ 科か 列れつ 麻あ 子こ 漆し 入い 漆し 入い

[illegible][illegible]

金行キンカウ 西卷傳ニ西ニ方金
行之ノ氣也ト云
南呂ナリョ 月令
律

秋分 中秋 清秋 挂秋 共ニ類言纂系要 出タリ八月フ云 剥

詩經 出 斷壺 相 高 氣勢兩相高上作セリ 赤

敗荷衰柳詩学大成ニ出タリ點瑟杜子美詩ニ傳回琴王陽明詩ニ

萬吟 聲ノ賦ニ出タリ 月 孤月 岩際有孤月浪中翻

建カ各月 樂天力
ミケツキノヲナリ
弓月
挂月
潘岳カ
殘月
江月

落月詩出

片月古今ノ詩ニ多用來ル 四月出所ヲ記スニ不及 海月活法ニ海月當四夜

好月同詩ニ從來好月多雲如何 淡月陳去非詩ニ出 野月黃

城月詩ニ出 山月除四美詩ニ出 秋月謝明詩ニ出 皓月詩ニ出 月乃吳

名水輪東坡詩ニ出 冰鏡謝莊詩ニ出 金波詩ニ出 銀盤盧

猶淮南子金精河圖帝覽玉盤詩ニ出 蟾兔九經通義

詩ニ出金丸詩ニ出 金環詩ニ出 蟾兔九經通義

合璧漢書 玄兔李周翰詩ニ出 蟾兔李周翰詩ニ出 蟾兔李周翰詩ニ出

白シレリ其ニ因テ名ク月色ハ皓魄詩ニ出 皓魄李詩ニ出 蟾兔李詩ニ出

碧岩序ニ出 雁鴻雁詩經疏ニ大曰鴻小曰雁來雁禮記月令

雲雁范彦龍詩ニ出 一雁杜詩 宿雁杜詩 落雁日沙雁杜

雁字山谷詩ニ出 雁雁詩ニ出 雁雁詩ニ出 雁雁詩ニ出

接武羊祐詩 來賓月令 雁賓杜詩 雁奴王介甫詩

雁塞梁列記 回雁郡國志 鴻毛漢王褒頌 野性活法

野性去知寒暑 天倫活法 天倫不失陳后班超

九月九月 九月九月 九月九月 九月九月

不不 不不 不不 不不

相撲八月 泉涌寺舍利八月 重陽宴九月

のふんのふん のふんのふん のふんのふん のふんのふん

日 廿八日 福王神宗 廿八日 歩蓋神といふこと

系 廿八日 倭国付村系 廿七日 野宮の別 桂川の

四々 系 廿八日 野宮の別 桂川の

百菊 系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

系 廿八日 野宮の別 桂川の

杜若 ツクシ 松 マツ 杉 スギ 楓 カエデ 榎 エノ 樺 カハ 栗 クリ 胡桃 クワナツ 梨 ナシ 桃 モモ 梅 ウメ 杏 コウ 李 リ 櫻 オウゴン 橘 ダイダイ 柑 カン 橙 ダイダイ 柚 ユ 柿 カキ 蘋果 リンゴ 梨 ナシ 桃 モモ 梅 ウメ 杏 コウ 李 リ 櫻 オウゴン 橘 ダイダイ 柑 カン 橙 ダイダイ 柚 ユ 柿 カキ 蘋果 リンゴ

[illegible]

三十日 九月

詩小用詞の類

季秋 月令

菊秋

暮秋

晚秋

深秋

秋 秋末

抄秋

商風

金風

素風

高風

涼風

悲風

白雲

無射

風

起兮白雲

琪樹

紅樹

樹落

荷衰

蕭瑟

潭清

烟凝

樹落

荷衰

蕭瑟

等

場詩經

皇陽

佳節

嘉節

韓退之

詩

泛菊

風土記

桑落

龍沙

千騎

權德輿

系菊

艾菊

黃華

月令

離菊

陶明

詩秋菊

楚辭

耳菊

深黃

白菊

花

野菊

聚

殘菊

日精

本

菊

治曆

介推

黃金

杜詩

周盈

本草

漁隱

黃白菊

月采

陸龜蒙

詩

出

詩

出

落英

楚詞

出

詞

冬乃詩を十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

冬乃詩

十月

五回弓馬之術

[illegible]

無事に就く

八日蓮

中よりえみゑいふといふ聲をと座の弘はあへて
 とうとうとえいふといふ聲をとりて三エの反えりてめ

こゝと上りて一々れを俗ふあやまりくけの字とて通ふ
るがとあるにやうに俗なりとありとあるを俗ふとあり

下久

二十
十六
日
庚
申

補
下

立
子
子

小雲の影 中々 法師考 方象 是 大開 くる

うゑ火　うゑ火　うゑ火
カハ　コト　ニク

茶　カ　台　切

初志　久　れ

志　久　れ　付　志　久　れ
夕　志　久　れ　と　く

川
吉の母
志
和
おのて
おのて

月の霜
屋敷
ものゝ家の
ものとの
もの
もの

新葉しれ
 しむらむく
 新葉しれ
 しむらむく

一野乃^{ツキ}
乃^{ハキ}
乃^{ヲキ}

菊キク 估カ 尊クニ 多タ 七ナナ 八ハチ 九ク 十ジュ 十一ジュウイチ 十二ジュウニ 十三ジュウサン 十四ジュウヨン 十五ジュウゴ 十六ジュウロク 十七ジュウシチ 十八ジュウハチ 十九ジュウキュウ 二十ジュウニ 二十一ジュウサン 二十二ジュウヨン 二十三ジュウゴ 二十四ジュウロク 二十五ジュウシチ 二十六ジュウハチ 二十七ジュウキュウ 二十八ジュウニ 二十九ジュウサン 三十ジュウヨン 三十一ジュウゴ 三十二ジュウロク 三十三ジュウシチ 三十四ジュウハチ 三十五ジュウキュウ 三十六ジュウニ 三十七ジュウサン 三十八ジュウヨン 三十九ジュウゴ 四十ジュウロク 四十一ジュウシチ 四十二ジュウハチ 四十三ジュウキュウ 四十四ジュウニ 四十五ジュウサン 四十六ジュウヨン 四十七ジュウゴ 四十八ジュウロク 四十九ジュウシチ 五十ジュウハチ 五十一ジュウキュウ 五十二ジュウニ 五十三ジュウサン 五十四ジュウヨン 五十五ジュウゴ 五十六ジュウロク 五十七ジュウシチ 五十八ジュウハチ 五十九ジュウキュウ 六十ジュウニ 六十一ジュウサン 六十二ジュウヨン 六十三ジュウゴ 六十四ジュウロク 六十五ジュウシチ 六十六ジュウハチ 六十七ジュウキュウ 六十八ジュウニ 六十九ジュウサン 七十ジュウヨン 七十一ジュウゴ 七十二ジュウロク 七十三ジュウシチ 七十四ジュウハチ 七十五ジュウキュウ 七十六ジュウニ 七十七ジュウサン 七十八ジュウヨン 七十九ジュウゴ 八十ジュウロク 八十一ジュウシチ 八十二ジュウハチ 八十三ジュウキュウ 八十四ジュウニ 八十五ジュウサン 八十六ジュウヨン 八十七ジュウゴ 八十八ジュウロク 八十九ジュウシチ 九十ジュウハチ 九十一ジュウキュウ 九十二ジュウニ 九十三ジュウサン 九十四ジュウヨン 九十五ジュウゴ 九十六ジュウロク 九十七ジュウシチ 九十八ジュウハチ 九十九ジュウキュウ 一百ジュウニ 一百一ジュウサン 一百二ジュウヨン 一百三ジュウゴ 一百四ジュウロク 一百五ジュウシチ 一百六ジュウハチ 一百七ジュウキュウ 一百八ジュウニ 一百九ジュウサン 二百ジュウヨン 二百一ジュウゴ 二百二ジュウロク 二百三ジュウシチ 二百四ジュウハチ 二百五ジュウキュウ 二百六ジュウニ 二百七ジュウサン 二百八ジュウヨン 二百九ジュウゴ 三百ジュウロク 三百一ジュウシチ 三百二ジュウハチ 三百三ジュウキュウ 三百四ジュウニ 三百五ジュウサン 三百六ジュウヨン 三百七ジュウゴ 三百八ジュウロク 三百九ジュウシチ 四百ジュウハチ 四百一ジュウキュウ 四百二ジュウニ 四百三ジュウサン 四百四ジュウヨン 四百五ジュウゴ 四百六ジュウロク 四百七ジュウシチ 四百八ジュウハチ 四百九ジュウキュウ 五百ジュウニ 五百一ジュウサン 五百二ジュウヨン 五百三ジュウゴ 五百四ジュウロク 五百五ジュウシチ 五百六ジュウハチ 五百七ジュウキュウ 五百八ジュウニ 五百九ジュウサン 六百ジュウヨン 六百一ジュウゴ 六百二ジュウロク 六百三ジュウシチ 六百四ジュウハチ 六百五ジュウキュウ 六百六ジュウニ 六百七ジュウサン 六百八ジュウヨン 六百九ジュウゴ 七百ジュウロク 七百一ジュウシチ 七百二ジュウハチ 七百三ジュウキュウ 七百四ジュウニ 七百五ジュウサン 七百六ジュウヨン 七百七ジュウゴ 七百八ジュウロク 七百九ジュウシチ 八百ジュウハチ 八百一ジュウキュウ 八百二ジュウニ 八百三ジュウサン 八百四ジュウヨン 八百五ジュウゴ 八百六ジュウロク 八百七ジュウシチ 八百八ジュウハチ 八百九ジュウキュウ 九百ジュウニ 九百一ジュウサン 九百二ジュウヨン 九百三ジュウゴ 九百四ジュウロク 九百五ジュウシチ 九百六ジュウハチ 九百七ジュウキュウ 九百八ジュウニ 九百九ジュウサン 一千ジュウヨン 一千一ジュウゴ 一千二ジュウロク 一千三ジュウシチ 一千四ジュウハチ 一千五ジュウキュウ 一千六ジュウニ 一千七ジュウサン 一千八ジュウヨン 一千九ジュウゴ 二千ジュウロク 二千一ジュウシチ 二千二ジュウハチ 二千三ジュウキュウ 二千四ジュウニ 二千五ジュウサン 二千六ジュウヨン 二千七ジュウゴ 二千八ジュウロク 二千九ジュウシチ 三千ジュウハチ 三千一ジュウキュウ 三千二ジュウニ 三千三ジュウサン 三千四ジュウヨン 三千五ジュウゴ 三千六ジュウロク 三千七ジュウシチ 三千八ジュウハチ 三千九ジュウキュウ 四千ジュウニ 四千一ジュウサン 四千二ジュウヨン 四千三ジュウゴ 四千四ジュウロク 四千五ジュウシチ 四千六ジュウハチ 四千七ジュウキュウ 四千八ジュウニ 四千九ジュウサン 五千ジュウヨン 五千一ジュウゴ 五千二ジュウロク 五千三ジュウシチ 五千四ジュウハチ 五千五ジュウキュウ 五千六ジュウニ 五千七ジュウサン 五千八ジュウヨン 五千九ジュウゴ 六千ジュウロク 六千一ジュウシチ 六千二ジュウハチ 六千三ジュウキュウ 六千四ジュウニ 六千五ジュウサン 六千六ジュウヨン 六千七ジュウゴ 六千八ジュウロク 六千九ジュウシチ 七千ジュウハチ 七千一ジュウキュウ 七千二ジュウニ 七千三ジュウサン 七千四ジュウヨン 七千五ジュウゴ 七千六ジュウロク 七千七ジュウシチ 七千八ジュウハチ 七千九ジュウキュウ 八千ジュウニ 八千一ジュウサン 八千二ジュウヨン 八千三ジュウゴ 八千四ジュウロク 八千五ジュウシチ 八千六ジュウハチ 八千七ジュウキュウ 八千八ジュウニ 八千九ジュウサン 九千ジュウヨン 九千一ジュウゴ 九千二ジュウロク 九千三ジュウシチ 九千四ジュウハチ 九千五ジュウキュウ 九千六ジュウニ 九千七ジュウサン 九千八ジュウヨン 九千九ジュウゴ 一万ジュウロク 一万一ジュウシチ 一万二ジュウハチ 一万三ジュウキュウ 一万四ジュウニ 一万五ジュウサン 一万六ジュウヨン 一万七ジュウゴ 一万八ジュウロク 一万九ジュウシチ 二万ジュウハチ 二万一ジュウキュウ 二万二ジュウニ 二万三ジュウサン 二万四ジュウヨン 二万五ジュウゴ 二万六ジュウロク 二万七ジュウシチ 二万八ジュウハチ 二万九ジュウキュウ 三万ジュウニ 三万一ジュウサン 三万二ジュウヨン 三万三ジュウゴ 三万四ジュウロク 三万五ジュウシチ 三万六ジュウハチ 三万七ジュウキュウ 三万八ジュウニ 三万九ジュウサン 四万ジュウヨン 四万一ジュウゴ 四万二ジュウロク 四万三ジュウシチ 四万四ジュウハチ 四万五ジュウキュウ 四万六ジュウニ 四万七ジュウサン 四万八ジュウヨン 四万九ジュウゴ 五万ジュウロク 五万一ジュウシチ 五万二ジュウハチ 五万三ジュウキュウ 五万四ジュウニ 五万五ジュウサン 五万六ジュウヨン 五万七ジュウゴ 五万八ジュウロク 五万九ジュウシチ 六万ジュウハチ 六万一ジュウキュウ 六万二ジュウニ 六万三ジュウサン 六万四ジュウヨン 六万五ジュウゴ 六万六ジュウロク 六万七ジュウシチ 六万八ジュウハチ 六万九ジュウキュウ 七万ジュウニ 七万一ジュウサン 七万二ジュウヨン 七万三ジュウゴ 七万四ジュウロク 七万五ジュウシチ 七万六ジュウハチ 七万七ジュウキュウ 七万八ジュウニ 七万九ジュウサン 八万ジュウヨン 八万一ジュウゴ 八万二ジュウロク 八万三ジュウシチ 八万四ジュウハチ 八万五ジュウキュウ</

山
名
カ
リ
ハ
ナ
ホ
タニ
ヤ
ツ
テ
ナ

カニキク
ツハ
ハチ
クキ
ナ
ハチノ
カフラ

石菖蒲 タイコン 荳蔻 タイコン 荳蔻 タイコン

大根のく 蕎麥刈 納豆汁

後

子
細

清之

しとうち

カ
テ

櫛ホノ

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

今
○
○
○

長
痛
四

工部司水
石

而貝帝

寒風
迎

鮑明遠

水德出

卷之六

散ホソ 塩エ 活カ 法ホウ

一陽子集の

卷之四

交あつて候日と外の花戸と知らるゝにあらは

鷹の巻 一日 刊止冬 十二月の朔 芝居新入

一陽の巻 後とといひ 宮内とあらは

相掌の巻 上中 山科 上巳 平野

春日 上中 春日 上中 當磨 上巳 翠川

楊 上中 南 上中 中山 上巳 杉尾

大 上中 國 上中 若 上中 川 上中

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

[illegible][illegible]

節

節

卷之五

五

山

12

下
知

望

予

也

七

名月ナツキイモとわかれん
 こゝろをよ名来代ミヨダイの秋乃月アキノツキ
 おとしめい教ヒツギ生れ廉唱ニカヲウチ料
 松マツといふは花ハナらる里サトのかきけ
 つものこれうそいふくやうに
 ハ智乃津センフンをかあをも花ハナかんる
 立圃タテウロ 白雲シラクモ 衆利シュリ 立圃タテウロ 立圃タテウロ

五

法眼
志

宗姓

維舟

伊若

信德

同

あふふと花ハナ月のうく玉タマ衣イ

三
三
三

名ハ今朝、屋ノ本ノ餅、堂ノ花

之字切

志玉何々と同ハむくけぬ

五圃

二字切

何^{ナニ}も^モ名^ナ不^フと^ト言^{イハレ}ふ也^ヤ

御免

三
 後
 カ
 十
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

繼ヤリ栴ヤス乃ナリ結サヒふフとトいイふフ人ウタ爲タ花ハナ也ナリ

先弘

園句

七口走

乃

卷之五

クニ

休 休

三

粉記

卷之六

癸

懷欠

世の

七
ラ

24

約

子

天山堂

茅質

如棟

又傳風也

柏堂

古

氣

32

孫子

7

編流子

神体 ニヤスキ ミタラシ

神光 ニヤスキ

日月 ヨリニウシ

雲 クモ

神 ニヤスキ

偏那 ヒモロキ

小衣 フニコロモ

伊豆 イモイ

神 ニヤスキ

神 ニヤスキ

神 ニヤスキ

神 ニヤスキ

天門 トリサ

井 井

天 ニヤスキ

天 ニヤスキ

天 ニヤスキ

天 ニヤスキ

舞衣 ミイロ

舞衣 ミイロ

舞衣 ミイロ

舞衣 ミイロ

舞衣 ミイロ

舞衣 ミイロ

舞衣 ミイロ

盤 ハシ

盤 ハシ

盤 ハシ

盤 ハシ

盤 ハシ

盤 ハシ

盤 ハシ

八足 ヤツアシ

八足 ヤツアシ

八足 ヤツアシ

八足 ヤツアシ

八足 ヤツアシ

八足 ヤツアシ

八足 ヤツアシ

供養 クニイヲケ

供養 クニイヲケ

供養 クニイヲケ

供養 クニイヲケ

供養 クニイヲケ

供養 クニイヲケ

供養 クニイヲケ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

神教 ニヤスキ

忌目 キニツ
二時 ヒヤク
系 サニ
少親 ヲサナハ
有 アリ

患ウレ 淚ナタ 力チカラ 足アサ 發カサ 切キ

長別 脇の内 表小龍 雲々 自誓 紙

馬の河原

刀藏死人棺

[illegible]

三途 苦泉 白骨 屍 古塚 軍途 人頭

卒於歸

人瑞

クモノクニニト
殿上人
氏士
工の字にけり
侍

兵ツバモノ
弓フウウ
鑿ソウ
匠シヤ
役ニヤ
匠シヤ
匠シヤ
匠シヤ
匠シヤ

以紅尾
虎云
靜人
子川
夢土
商人
裁ノ

望望 毒近 伶人 樓上 菊 此 方尺 白

業ウツ
下船シモヘ
士ムニカク
子ムコ
毒ハニタ
魚キヨヲウ
弟フナユ

子^コ
主^{ジュ}
子^ミ
我^ワ
汝^ニ
福^{フク}
好^{コイ}
増^{ゾウ}
奴^ヌ
婢^ヒ
掌^{ショウ}

歌
テ
兄
弟
民
奴
家
子

乳母 瓦徒 有子 推更 盜賊 福豆

不
下
久
能
侍
始
修

白子 朋友 竊 什候 兵

人倫小部之二款合

東云 皇女 跡 子家

亭ニカト 宮ニヤ 款シ王ソウ 切ニヨイ腹ニ 中オニイ院ニ 化セニ洞トウ 新ニシ院イ 杏シイ子イ

非人 花分

公人万入道 公姫 人長老 一つ一家

六款 式 法士 典茶 下戸 寮居

祖師 橋姫 家臣 市江 外科 二人 ちきり

作大智 人形 百姓 呪役 大工 伽 各各

彈 症 育代 官 月と友 花と友 酒田 餅 湯

所屋 月付 付 増 依保 姫 結回 姫 東寺 和尚

私一族 教兵 元文 虎生 地取

花分 神楽 月待 月守 七夕 夏 霊薬

糸 更 橋書 智周 曜 時 極 暁 時 延

子 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

花 燦 新 狐 敬 越 鶏 別 の 鳥 龍 露 如 汲

脇一五川乃新

脇一五川乃習あり一ふと相對二ふと打添三ふと

いふと邊付四ふとさう海付五ふとけとさうに宝祇

法師の云脇にたれおやーちふとあるへういふと

月やれめさには月をさうにけさうらーいふと

句ふとさう一ふとさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

二四十二
此處

梅^{ツバキ}花^{ハナ}ぬきと山^{ヤマ}里^{サト}とく^{ツク}

う^ウ海^{ウミ}乃^ノ花^{ハナ}人^{ヒト}さ^サふ^フ

是^{コレ}の^{スガタ}海^{ウミ}と^{ユク}能^{スミ}く^{スミ}玩^ワ味^ミく^ミ服^{フク}の^{フキ}新^{フキ}と^{フキ}く^{フキ}

ら^ラふ^フに^ニお^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}

衣^{フシウ}列^{レツ}川^{カハ}張^{セウ}千^{セン}白^{ハク}牙^ガ四^シの^ノを^ヲと^トり

ね^ネも^モう^ウけ^ケを^ヲと^トく^ク月^{ツキ}の^ノ服^{フク}く^ク永^エ治^ジ

太^{タイ}神^{シン}文^{ブン}子^コ白^{ハク}牙^ガ一^{イチ}

名^ナの^ノ張^{セウ}を^ヲと^トく^ク山^{ヤマ}乃^ノ張^{セウ}を^ヲと^トく^ク字^ジを^ヲと^トく^ク

極^{キョク}り^リお^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

の^ノ張^{セウ}を^ヲと^トく^ク月^{ツキ}の^ノ服^{フク}く^ク永^エ治^ジ

ふ^フい^イハ^ハ他^タ例^リの^ノ如^ニく^クお^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

身^ミ三^{サン}乃^ノ仕^シ仕^シ

才^{タイ}三^{サン}脇^{ワキ}小^コは^ハく^クと^ト付^ツけ^ケを^ヲと^トく^クと^トく^クと^トく^ク

大^{ダイ}勢^{セイ}に^ニさ^サく^クと^トく^クと^トく^クと^トく^クと^トく^ク

を^ヲと^トく^クと^トく^クと^トく^クと^トく^クと^トく^ク

お^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

お^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

お^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

お^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

お^オひ^ヒめ^メる^ル服^{フク}の^ノ新^{フキ}と^{フキ}く^ク

小字號等祕傳

とせん
の
に
人
い
か
え
ん

卷六

此言川向ふかよえに
糸ハ是よりなり

七

12

今に

三

合

一

物造

世

力

井 是ハ伊勢

井のそよ

女をくら

上知不足

モノ

物々

清

卷

是子

卷之六

ぢつと居ると病むがごとし

秋乃こゝろとぞ秋

秋乃こゝろに重なる

庭にやせにうらやま

是にあと川やちねとありぬとらえもせにうらや

そのふとありとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

秋の初とやま

さむととらえとらえとらえとらえとらえとらえ

いまだとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

これにふとありとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

るゑととらえとらえとらえとらえとらえとらえ

焚くものうらとらえ

惣然ととらえとらえとらえとらえとらえとらえ

戸ふとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

そいづのうらとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

後に一乃ちとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

小殿のうらとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

せととらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

れととらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

生後とらえとらえとらえとらえとらえとらえとらえ

おけいさる^{カウリ}ね^レは^ヲん^ニず^コろ^ロく^ハ一の^カ子^イ一^ニと^ヲほ^ク
とろけ^レひ^レも^{コウ}田^ニ酷^クとい^ハ人^ニも^ハ久^カ髪^ミ盤^ビの^ハこれ^ニ
あ^ハろ^ハろ^ハれ^ハを^ハず^ハり

けやうねあまのまゝにふたつのおくへーとてふ
をわしとてふ

去嫌詞也

い
右
二つと一、麦ふちむた右と右仲右付古右代古今集なとの記も
右二つの内こそはいさしあへといふんは通とも有る右記古人古事
右筆右物右酒木の右いりしへは折とすうられこのまゝにひくへ
二のうへ又いりへはかぶら右と右かきうら右の字は、このまじ
右いりしと二つ但しいへにも右とより二つも
右いりしと二つ但しいへにも右とより二つも
右いりしと二つ但しいへにも右とより二つも

おひのちちをい

稻葉

三つふ稿三の外ありいあひうりい子
 に二台まうい子に田舎へむくと媛
 伊勢の神

[illegible]

いふやうなものの思ひ
そのおもひをこころに
石火矢 いしひや
おとろへ はやく
放 はなつ

[illegible]

家子 イナコ 家来 イナ の 人 ひと とらふ
 家 イナ と 出 イデ
 尺 イナ 丈 イデ 家 イナ とらふ
 而 イナ と 出 イデ

電 燈

字に二句去夕時ふくまふなりとく
 夕中と暮るふも二句さうあり
 何下
 思ひことこころいふらふいふく
 思ひことこころいふらふいふく

いそぐに
新紙を
お家目
糸子

子^こ
子^こ云^{いふ}ひ^ひあ^あこ^こと
^{イナ}偏^{へん}系^{けい}乃^の
^{クモ}凡^{ばん}糾^{きう}は、
乙^{おつ}力^{りき}人^{じん}

九

初休ハツヒ
初ハツ

とくは細ふてもやまをふにといふ
れやなとのいふとふふいふの字

いそぐやるとのふり **むやむ** ふりやふのふり二つあるその字がの
字すの字でこの字ふにけいさ二つある

溪 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

羽 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

春 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

増 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

花 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

神 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

橋 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

山 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

初 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

秋 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

月 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

七 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

月 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

山 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

橋 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

人 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

春 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

増 二つあるふり二つあるの初め
いそぐやるとのふりにけいさ二つある

袴 ハカマ 袴の字をいふ意 法 ホウ 法はさういふ字 拂 ハク 二句云

針 ハリ 針の字をいふ意 針 ハリ 針の字をいふ意 針 ハリ 針の字をいふ意

生 ナマ 生の字をいふ意 生 ナマ 生の字をいふ意 生 ナマ 生の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意 座 ザ 座の字をいふ意

下
心
一
心
七

三
一
五
六

不滅
なり
不
子

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

の面あり花ふ
おとろへー

同
石

とく愛句

十二

右の海を飛せしむ

ゆふとゆふと

と 宛
ト
宛
一ツツ
二ツツ

本と

我々江にありて居る

イカダ
トコ
矢の庫

こしらへ
とくろ
泰三の四

痛
と云ふ病
やうな病

吳名不才
吾子不才

とて産物
法の如

いふまでもなく新編

下
心
一
心
七

三
一
五
六

不滅
なり
不
子

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

の面あり花ふ
おとろへー

同
石

とく愛句

十二

右の海を飛せしむ

ゆふとゆふと

と 宛
ト
宛
一ツツ
二ツツ

本と

我々江あゝに居る

イカダ
トコ
矢の庫
ありて

こしらへ
とくろ
泰三の四

痛
と云ふ病
やうな病

吳名不才
吾子不才

とて産物
法の如

いふまでもなく新編

と
女部 記
三つちふらうと一つおと
うとてた二つとて一

鬼クニ
又邪祇也マヤカキ

とすの字といひ書ふの字
といひそおふ二つありや
とすの字といひ書ふの字
といひそおふ二つありや

一ツ上三ツの山勢なり家も
 今の大和と云ふ山勢なり
 小野 此三山は
 志 三山は

[illegible]

二重考の終り
 了ふ是より
 萬羽川 著 之の 鑑 照 の 記 下
 此は 鑑 照 記 下
 此は 鑑 照 記 下

小田久比 ぬるの字に二をまゝ取ひ色
うきうき 二をまゝとてハ二をまゝ

[illegible]

夢の心を又方とてまこと
 と云ふは、迷ひつゝ迷ひ不

今うのそのおももくしふとまの何とてい
 多ふちとえ秋のものとてふそ秋はのちと
 今うのそのおももくしふとまの何とてい
 多ふちとえ秋のものとてふそ秋はのちと

の字をけくしゝるを
 うふの字をあは
 とやり
 状なり今この地二座あつたり生糸の
 とうりひものありけとくさふ又二つ

廣義のこ
 秋たふい
 一りそふ
 又五十一
 増
 少ふ
 いさうとむ
 もあふふ

長
 田をいふと
 の数二つ
 よあ
 人倫も
 形ふ

火の
 白
 道
 なる
 へ
 へ

栄家
 栄つて
 栄の

[illegible]

一 聖人蒙
 蒙の
 く
 不
 以

[illegible][illegible]

ふろ うかまろくろかろくも 霞に カミ 雲乃 カミ

衣 カミ の字にみる カミ 衣の細 カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

衣 カミ の字にみる カミ 衣の洞 カミ 衣の字にみる

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the age of the document.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the age of the document.

下知二句を以て
せうの人の心を

世尊の心を以て
其の心を以て
其の心を以て
其の心を以て

ヨス
あね
二
とく
一つとて
嫁
二つとて
米
こめたし二つに

私を眞健主殿の皇子と仰せられたるは、
の御用にもあれとて物とていと有りとも、
お疾

[illegible]

有
フルサヤ
玉の光
此の光
玉の光

玉のこに ちのちと ずぬの

[illegible]

淺
 あり
 地
 浅
 宗
 宗
 宗

川上
山形
五

の玉子珠は珠玉眼
志珠をさしはるまじ
し物^{モノ}の玉^{タマ}
家の玉珠の玉^{タマ}
更^{モウ}

乃玉冬 玉和 玉御 玉珠 玉以 玉床 玉環

曾てのやういふれは
勢よく流るゝを
あつた
なり

夢心抄云
 夢あり
 夢玉
 石のともさうやふ
 夢玉
 宇佐公

[illegible]

小三子あり居るあり
 田の居る
 居る二つあるあり
 門田 居るあり
 田

乃字
なつてはるゝこし格がー
田ふ
いふうのちとひいてた

五才
 今更
 果
 金形集
 金より
 回
 かりをうつまへ橋を留
 そりなとびるさうし
 たのち

とろろ田の字より泥
田タに
生田うと田の義田と
あつた字よりとろろ
とろろひんた

田の字を又うゑたりは又ふといふ田の字は又ふといふ田の字と四とを

[illegible][illegible]

物の上といふものうおふあさこ
 カケ
 物の上といふものうおふあさこ
 二つを山を
 二つを山を
 二つを山を
 二つを山を

[illegible]

竹の林
竹の葉

金抄竹あ

竹地より竹へまのまのともまのま

4
 てもある
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 52

たふかれ

多道松印

あつといふものゝすゝめたるをいふは

ちうちうとてふぬるまきふあり
 ちうのちうとてふぬるまきふあり
 玉章 とつて初め

[illegible]

子よみ
 焼
 つまやぐおの白つあくと
 焼
 子よみ

人々を以て其の徳を以て火を以て其の徳を以て

名子と云ふは此の如く
 名子と云ふは此の如く

を秋の神紙に方ふよりくむをあらく
應

[illegible]

あくとしとくも 松市椿餅 お二の ちんちん ちんちん

あけくちとくも 縫尾白尾の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

あけくちとくも 常の 物小

はるるい 眠

七のまゝ一

人の夜

七のまゝ一

多れ寝

しるるい 睡

七のまゝ一

人の夜

七のまゝ一

多れ寝

ぬるふ

子目

入ぬふ

子目

根

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

七のまゝ一

[illegible][illegible]

室

一
白

貴

のちのち

卷之五

二心所

五

ら
せ

三十一

五

櫟

一、極子金
二、子金

三十一

かくし等つひちの月まつとくもさちひや

なほつゝも他ひりの字つゝも

二

もろと堀村の字あり二つ 走 居る
う一つ西堀と一つ多々木と一つ東堀と

柳りしをぬきて
 ともひをのびて
 木才

[illegible]

卷之四

乃のふくちちち
 乃のふくちちち

卷之四

ト

子

室

卷之四

橋

卷之四

Dein

王

のんき

一

又

3

多

一、此の

の
ハ
カ

牛 ウシ 牛 ウシ 魚 イサ 魚 イサ 増 マシ 増 マシ

に ニ 七 シ 信 シン 信 シン 増 マシ 増 マシ

イ イ 二 ニ 二 ニ 二 ニ 増 マシ 増 マシ

カ カ 猪 ブタ 猪 ブタ 猪 ブタ 増 マシ 増 マシ

井 イ の ノ 字 ジ 井 イ の ノ 字 ジ 井 イ の ノ 字 ジ 井 イ の ノ 字 ジ 井 イ の ノ 字 ジ

顔 ガン 顔 ガン 顔 ガン 顔 ガン 顔 ガン 顔 ガン

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ 乃 ノ

玉水 方知有 野極 山分作之く野小曲之とく
中電の今一つ有る一 名

長雨 ニツチもニツチ
 のや キリ 親 ニツチも
 子 ニツチも

かふささるゝあ
こつふささるゝあ
せり
葉
春
せり
葉
正己屋と云ふ

能の獨
吾
吾

乃字 ハムを 軒 小庵 増材 良 暖簾

二つ居ると
おれ布と一
蚕
一匹を
立し
糲
フヒ
て今こつ
除
つるも云ふち
老
フヒ
ゆ

老いのなもあせうくし 老いのなもあせうくし

老の字は二句の如く
老の字は二句の如く

あふろ
新
竹の子けくさ
わのつたやうなうて二つ下のあは

易の月苑よりあるものあり
ありはるのりきくもの、
ヨキハ
易の月苑よりあるものあり
ありはるのりきくもの、

[illegible]

萩^{ラキ} 一の地のちあたる何れ乃傍萩^{ラキ}のちあ

[illegible]

ふかき草の根を
とつて煮て又つ
石をいひの腰カウ
にさへり木をのこ
す二つをさへり
思ひヲモの

ろ
ろの字
ろ
ろ
人係り
れ
れ

字に二
思ふ
言ひ
か
こゝろ
こゝろ

七
白
七
白

とほの字に
おともて居るのを

又
 等
 かくて之をくさし之をまじりて池人のうゑを助けぬや
 といふのふし知とくは外二つをまじりて又あるふし知

世に爲るゝ事や
一ふたふたの事

御のふまにぞいそくせし
細部のまといそくせし

山城のどいぬ

里の各面と照合し

山賊
人傳
山賊

三句
五句

山乃下

山の嶺

For the
naqman's tra
e 110000 31

卷之四

今一と云

和名 和

宋三白文

一 おの病を治す

つとゑに焼

二句を
ある

多財多子

居而百

力也
松の尾と

...

[illegible][illegible]

おとまうくういさのなを **文** 志強文書おののちふつにふと
くおあふい面ときき **文** 志強文書おののちふつにふと

久 **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

ふみ **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

あれおふ **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

に **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

も **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

月 **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

吹 **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

降 **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

い **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

う **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

あ **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

い **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

え **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

お **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

あ **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

い **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

え **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

お **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

あ **文** 志強文書おののちふつにふと **文** 志強文書おののちふつにふと

風折フウザイ
 二白ニハクも吹フクふも
 増ゾウ
 歩フ
 人ヒト見ミん人ヒト是コノは
 将基マサキの弱ヨロ乃ハ歩フとシて

富方之書
眞法經くのとく弱く
教ふ計をいふるす
吾も弱く可して巨神

紙字長にありて流し通ひを尋
色を乞ふ強しと云ふつゝも毛を
乞ふと云ふの冬は嚴乃ちうめ
に赤人の云ふ

といふは、
 の代におよ
 といふは、
 の代におよ

凡修此等事、
先須心平氣和、
然後下筆。如
有怒氣、或有
憂思、或有不
平之氣、或有一
毫私意、皆不
可與筆。且書
法要得自然、

九條の二式一名のあかりの所を辨けしとあるの事を辨けしとの
控も多きとされ予の二云ふに知所人ぞれなりうきひなき更

海の横を打破しく僻ある例といふんといふやと云ふや
 角のひそそ然池と云ふやと云ふやと云ふやと云ふや

たふせし我々の機をたふせしうるをなりある
書の種を減せし他見あるともあらずに懐多き

己
本枯
只つまのの森と二つ他木の枯る枯る古木
とと娘木の字に二つま枯の字に二つまへー
こつじ

本より来ることあり
 白雲風流より来る
 おうしに
 本より来ることあり
 白雲風流より来る
 おうしに

[illegible]

志乃と
 志の山とてういふ山歌めは
 志の句
 志の
 志の

[illegible]

本の家から
よりそのに二百七
才の尊夜
に二百七

九十九重
知の花
ふねに二白をく

[illegible][illegible]

字にアサとなくさうさうにうたがひの字に

とあるを大田氏のいふのよみとてさういふ

手に 彼二句まゝに神書とて下すにさふよみくはて

とまゝに 三つ並下るゝイフとてトイハルとて

てさうり 下の小ふもさう年あもり

鉄炮 大ハニ 調布 天竺

月日の方に二つ世と 人々 天竺 天竺

おあさき 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あつた 天竺 天竺

あさやうけ 新井 二つ世早合 五郎 三つ世一

あつと明 二つ世乃名よりあつと明をいふに申すに老若を 有明に

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

あつと明の字に二つ世と明とをいふに申すに老若を あり明

久知あること二句 芦田二語 ありははるより久し 芦

鴨 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 鴨

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

山 二句あること三句あり久しあること三句あり久し 山

人のありあつたをいふ
 は、このありあつたをいふ

人のあつてゐることをいふ
 人のあること

し七 増 化 子 集 二 録

おを 又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

又 二 集 二 録

七句まで五つも同じ如くして下の三
を條とすに所あるは七三句まで然る

志の^もぞ　その志の^や　むじな　まゝ
て面を二つ　志のとそのおせちをふたつ　ねん

墨林

そのころあるよう

[illegible]

小糸と書くが、これは小松の邊
おの小乃字付といふことである。

野馬

[illegible]

かゝる月には、さうな月には、
あつた月には、あつた月には、

二つを又一つと云ふは、
あいのねは、あいのねの木のね、

此のふみ
名おま那
「あ」
あまのこ
かうそく

二 名 一 つ 山 形 外 と 色 外 の ひ と も と の 凡 之 法 一 山 形 外 と 色 外 の ひ と も と の 凡 之 法 一 山 形 外 と 色 外 の ひ と も と の 凡 之 法 一

小の字
 波や大庫の
 花匂ふ
 死す
 萩

小夜子
 月日戸施
 雲の

あま

酒サケ 一斗をくちくし、竹を破るともむる。あま

又月サツキ ありあり こと 月のさや 月のさや 月のさや

るも再になくとも各別の尺をあるは
さの字

任地有り
 有の字
 二万
 さい
 と
 有
 う

百八

人知余
秘法

カ

۱۵۱۱
مکمل

秋子之夢
金瓶梅

く一五

乙丁板

ひし

...



のえ

七

...

大 力

秋

一

告

くわ

毛

のそと

おとしそとふふふふふふ

おのの

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

おのれ

うもふふふふふふ

おのれ

うもふふふふ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature. There are some larger, more prominent characters that might be titles or section markers. The text is arranged in several lines, with some lines being longer than others. The overall appearance is that of a well-used, historical record.

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or series of entries from the previous page. The script is consistent with the one on the top page, suggesting it is part of the same document. The text is written in a dark ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature. There are some larger, more prominent characters that might be titles or section markers. The text is arranged in several lines, with some lines being longer than others. The overall appearance is that of a well-used, historical record.

月夜の白雲も同じ多かり月いささの秋
あゝ雲はあふれあふれ花はひれくさくさ

又ふしへ述懐の如きあれは平一然にいふところをいふものなり
作といふも地味へたるもののつうかゝる又若くは變なると述懐の如
かうは意の如きむとていふ意の心をいふ
意といふ意のともめかといひおこ意はいふこと也

ヤトニツミヘー君也

了りぬきぬきし事とて
雨と云ふはし
キヨシヨ ナルヤト
長あは成者
又のしきの書お読者他田名お又人とは宿り
てふしといふはし
ナルヤト
宿りぬきぬきし事とて

人倫に奉宿 曰者又乃云ふも云ふ一 宿

[illegible]

あきふとんりひくも片雲
ありふそのかりそな三月あり
うけふ事のね事れ行なりしはあけの光

梅

あきふとんりひくも片雲
ありふそのかりそな三月あり
うけふ事のね事れ行なりしはあけの光

しあけふ
ありては二句をあげるとえとえといふ
こゝろよりいへば
祖の志けるまゐりく人ゆきぬそと一字大なりとせよ
やがた(四)二句をあげよう
おとの歌

野
 聖人あはれに
 られり
 ふたのし
 一五二白あり
 西へ
 こころを
 まじりたるかゝ
 さみやくしにかつ

二モツキ
 二ク
 二白
 二ヨクタイ
 二ウチノ
 二ハチ
 二ヒヤウシ
 二秋

珠教シユス
増
常シシエマウ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be in a different script or dialect. The ink is dark and the paper is aged and slightly discolored.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a date.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be in a different script or dialect. The ink is dark and the paper is aged and slightly discolored.



も

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

おと

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines, with some characters circled or marked. The paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in several lines, with some characters circled or marked. The paper shows signs of age and wear.

味とてあふつ
おとてくまこ

すしき

すしき
すしき
すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

すしき

ぬほいさけ天とあどらんきんふ詠言と
 へそそふ偶勝うとらるる原よ陶然
 杜少陵別子なわの河さるる一聯
 のひありと韓愈則退孟東野やふに
 てふらんきんふとふらんきんふ其法
 言の格あり景祐年中に藤子あふのどとらるる累つ
 駕凡鞭霆以脱六の格あり東坡子使ホ
 凡鱗と云れい松偃蓋如轉其雨凄凉似秋七言力
 有客高吟擁鼻無人共喫饅頭とらるる我集ホの格
 言平五字せハ三平仄五字せハ三平仄五字せハ三平
 くらりくらり中々といふとらるる格

是及格とらるる常に慶長とらるる
 と連誦小おめて一たよて和詩人才子
 月夜といふふあふのいー安倍乃仲九
 遣唐使とらるる帰郷とらるる詩と賦
 といふ人ありとの詞といふ
 日本、昆卿、辭、帝都、征、帆、一、片、蓬、
 盡、明、月、不、還、沉、碧、海、白、雲、秋、色、滿、
 蒼、梧、
 仲九といふとらるる

[illegible][illegible]

声と際く一東光如陽磨を此平と母の
 色はり物中一句下の下ありにきひる物字と
 つく一をの通句とひる如く
 和漢の方より短句のふりた句字とよま
 ざる短句はくもへを入韻してしるは
 こそ和の長句の中にゆるる平とのきく
 かりとくへハ

寛永十五年九月廿五日御會

和漢

前白

露 思 御 砌 苔 次菰留
 虫 吟 詩 有 助 御

對白 雁 断 信 無 來 灰 一勢和尚
 いやさるは家の物方あつたり

松乃あしきとくもあつたり中如云
 ふとひる様通よまれのの蓋、今起發

暮 村 江 水 迴 灰 僧梵奎

かくの如く西八句乃内経は句わは句すもむも
 て乃内に對一と流るる七編句の下乃とあつれ
 字とく一をの通句とくもあつたりし

ゆる圖のく

たつ御初書とある所の下の

と入るにや一あると通句とくやとさるるの字の
式灰暗おつとあると通句の字と灰暗の字中の字と
糸いこれ 糸乃うに對あるをく

澄和の對ハ句ちわわ澄の對ハ句め

おもてハ句の内糸川の句とく

東坡山谷杜后 人名龍門雲谷 名周元龜德 年号

子美賈誼 白雲の詞陽篇の文史記周礼 書乃名系軍司

雲の曲なや 官名これと糸川とく

百骸乃内行又す句わあす句とく

花に中の内行に二ある二ある

月林和澄をこれに

あかもの一丸あ句乃物を糸澄いつとあかりも

あらしに二句とく一丸にあつめるも又

くくく此れ外果名はゆのものをわ

あらしも七それを一丸二句のわ雙方とく

一うつ有るも

あかま二句ち乃ものいまる龍字あう

つとあらしもあらしの字乃ゆと糸澄耕清の字乃

唐の字にあらあらしの字乃ゆと糸澄耕清の字乃

けやれとの字乃ゆと糸澄耕清の字乃

三才圖會

對句ツイにヲホの品ミナあり色ニキ對タテマツ數對タテマツ子コ

色 ヒロイ
 物 モノ
 馬 ウマ
 蹄 ヒツ
 同 ドウ
 對 タイ
 異 イ
 類 レイ
 對 タイ

五ノ對ハナハチ 月系ツキケイと立月對タチツキノオウ 南ミナミと義定ヨシサだををと凡ソボと

[illegible]

カツセウ
ト合掌村とらふもの
五と比とナと
有と色とふれ
ツキ

西

大徳孔坤や時作爲賊と名振徳義と虚稱して

射
あ
ひ
一

通句の如

韻

字あり

二

通に傳へ

剛
山

一、
二、
三、

王伯

入韻字省畧

東 いし 凡 ふん 空 くう 子 し
あつ 机 き 相 さう 中 ちゆう 崎 き 同 どう
あつ 考 かう 隙 きやく 穿 せん
あつ 枕 しん 衰 すい 曉 けう 倭 わ 戎 じゆう
あつ 工 こう 聰 そう 攻 こう 加 か 詔 しう
あつ 忠 しゆう 種 しゆう 充 しゆう
あつ 忽 くつ 充 しゆう
あつ 融 じゆう 東 しゆう 此 し

冬 とう 松 しゆう 海 かい 農 じゆう 漢 かん
あつ 神 しん 終 しゆう 側 せう
あつ 樹 じゆう

邦 ほう 龍 りゆう 宗 しゆう 客 かく
あつ 邦 ほう 碣 けつ 終 しゆう 壑 かく 終 しゆう
あつ 壽 しゆう 缸 かう 櫛 しゆう 扇 せん 孫 そん 半 はん
あつ 提 てい 任 じん 孫 そん 半 はん

まろやこる
こんなり

江 入句字 先所見 窓 まど 沈 ん 石 いし 抛 り 捨 る

支 時 じ 性 せい 何 い 首 けし 時 とき 旭 とき 池

片 か 校 けう 梨 り 男 にお 梨 り 芝 しば

後 け 連 づ 派 ぱ 派 ぱ 派 ぱ 派 ぱ

地 ぢ 基 ぎ 機 け 機 け 機 け 機 け

尼 ね 師 し 師 し 師 し 師 し 師 し

児 じ 児 じ 児 じ 児 じ 児 じ 児 じ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

盧 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ 部 ぶ

劬うづ 須もと 需もと 人ひと

欲ほ 物もの 殊こと 甫ふ 焉や

茶ち 菰こ 芻こ 藜れい

臺たい 均ぐん 臺たい 夜や 臺たい 限げん

灰かい 埃あい 魁けい 南なん 台たい 媒ばい

孩がい 孩がい 孩がい 孩がい 孩がい 孩がい

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

來来 來来 來来 來来 來来 來来

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

[illegible]

廟やしろの堂どうの廊ろうの至いた商人しやうじん

原はらの草くさ 橋はし 英えい 英えい

井いの草くさ 更さら 程ほど

鳴なりの鶴つる 紅くわう 生せい

明めいの着き 着き 法はふ 小せう 法はふ

習しゆの成なり 目め 成なり 成なり 成なり

兄あにの耕かう 末まつ 無む

秋あきの流りゆう 例れい 秋あき

頭かぶ 志し 志し 志し

横よこの横よこ 横よこ 横よこ

眸めいの眸めい 頰き 投な 偷ちゆう

露るの体たい 周しゆう 周しゆう

顯けんの柔じゆう 中ちゆう 中ちゆう

帳ちやうの入い 字じ 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

帳ちやうの書しよ 入い 字じ 字じ

するはみちのくさくさといふ又いふ家外花あけいふ歌
に山室の給ふくちひ入く月海と共になに
おんとくあつたのや花いふそになりふしえ今
うにさんといふて何なる人いふれに
按かきうん卯の花いふとまににわく
ね又句作のほろとあふふあふふふふふ
おれとまきの花をまひく何ふふの歌は
えいといふてもしうといふ

傳説のしめ

天城山とあるは神の宮

藤原の歌

何人乃きくみつる人

歌とまにといふその歌は文字にそ虚実と
いひ句の表にあらはれし物も歌と書ふは
おとしもやういふ

神歌といふ

歌は神を讃美の月歌を芭蕉

誓文拂と

拂ふふ神もえあらに誓ふれ 鷺水

歌は文字といふ文字といふは文字といふは

其面之役滝

應休計子需

夷講

カミノ
に
祚^{カミ}
あり
ス
月^ヒ
やえ
いと
憐^{コウ}

同

驛路朝市

賭クレー 杠チ 桿キ 小張セト 中ナカ ぬヌ とと 茸タケ の市イチ 回

待志

ニツク
は
種
の
時
の
印
也
也

諸の詠物一冊をよむかたに
 源氏

節のふとくけく月情とくくす安
 月

莫嘆野店無肴，
按薄酒堪沽，
豆莢肥。

是初子夢之以六新所其角

文乃心とくく 相とくく 考とくく 海

讀愛蓮說

月ヒ 鹽ナカリ 人ヒ こまふと道の花ハナ 野水

録書ノイ
ヨのコとくくくくくく

乞ふく彼とあつて安

くれと情縄いあつてのが 言水

彼とあつて乞ふとあつて安

了るゝゝゝ安

或るゝゝゝ安

文ふも筆の真かやせいのち 時あ

ふゝゝゝとせゝゝゝ安

あつて目やうらゝゝゝ安

強者ゝゝゝに居子強ゝゝゝと欺ゝゝゝ恃然やゝゝゝ

眼ゝゝゝに虎ゝゝゝも飛ゝゝゝもゝゝゝとゝゝゝつゝゝ

不戦ゝゝゝ勝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の敵ゝゝゝあつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世の夢と云ふは人々の夢

家の内をわくをたれ夫う下り

たふ鈴音乃経を世に八面にお枝しく支

字のつらぬれなく言句れ示とくこを

向ふ一跡作摩生くをくせんやいん

いん底の海

知恩院の一重櫓の雲ふり信徳

そと人田光の友乃才とくもく念ぬ

とめく一文不をん守にありくどう就ひり

ひれく俗年もの人くきくもく

あひよくいん知恩院の筆始

神祇の懐竜一同いん悪ものいんさく

彼り能く見ぬお波流乃能く起り

煙かんきんに生るるを南漢茶海の廣さ

かゝる及んぬ形のいん具へ持り今これ

祈よあつる筆は彼井井にまざる

者つゝおの乃行経い御講授離の徑と

をきく連歌入門い梅窓紫の乃と間と

歌ひふいあゝとてな何とてやに希

やゝをやをいんあゝとて人とて

うゑのこゝろをいふことなり

とてしるすべし

[illegible]

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written on aged, slightly stained paper and is arranged in approximately 12 lines. The ink is dark, and the handwriting is fluid and characteristic of the 17th or 18th century.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written on aged, slightly stained paper and is arranged in approximately 12 lines. The ink is dark, and the handwriting is fluid and characteristic of the 17th or 18th century.

一 人よりそとろよは流定じるとまーに口
 柳井と出といふ花のうにまふとつうとる
 花あとのめとくくく花のうにめくはと
 海もと出いふ海のとくは磯浜と
 一 字あくも叶と
 一 旅泊旅の霧中いつとと旅あしとといふ
 一 夏のとくは花と出いふ夏もくも
 花のうにまふと出いふ花のうにまふと
 一 花のうにまふと出いふ花のうにまふと

一 柳井の流定じるとまーに口
 一 花あとのめとくくく花のうにめくはと
 一 海もと出いふ海のとくは磯浜と
 一 字あくも叶と
 一 旅泊旅の霧中いつとと旅あしとといふ
 一 夏のとくは花と出いふ夏もくも
 花のうにまふと出いふ花のうにまふと
 一 花のうにまふと出いふ花のうにまふと

東栖といひしところなる人々よりいふに山家にいふや
のんく山徑よりいふに山小家イエサ居ていふやうに
うけつる人

客といふよりある人よりいふに経表と道と人
又いふ人といふに空勝といふにふくたの経

といふやうに

一社ミヤタウにやうに細神ミコ祇ニギといふといふに

と句作クサカにともといふに依りしところ

と云ふといふにいふにいふにいふにいふに

人

れけみいふともいふにれけみいふともいふに
あるにれよといふにれよといふに

名あるの条にいふに梅屋小亭に

人といふに梅屋小亭に

毎人毎立圃の四式といふに

のふにいふにいふに

いふにいふに

明義の奥秘と書と人

むらひたりやふたの云と

予の自毛筆なり其れは予の所と信ぜり
 然亦毛筆や新式といふ名は主筆の筆と
 信ぜり予の書の名といふは予の人の名は福の
 是と指りて此書は呼ばれ毛筆といふ云々
 書物に於て業とてする所なり作文の書は
 予の所なりとて指せり

元禄十一年 戊寅二月廿八日

洛陽書林柏公種元記之

京二条通晴明町

山邑西良太衛

江戸芝居町川町

同 是西良太衛



名訓
 非諧
 名
 威
 記

榮吉

修
德
堂
藏
書
印

張

